

資料 伏木久始先生による「本研究についての講評」

令和2年9月29日（火）

【結論】

最初に結論を申しあげる。本校の研究は、授業研究という枠組みではなく、教育課程研究という視野で考察されるべき、総合的な要素をもっている。そういう視野で点検する必要がある。教科・領域等の授業と、学校行事などの特別活動がつながり合い関連し合っ、一人一人の生徒にとって、「独創性がどう育まれたのか」を語り出す教師集団になっているかを、残り半年で点検するとよい。

【授業を参観して】

理科の授業を拝見し、黙々と自分の発想を確かめ、アイデアを広げようとする子どもの思いが見られた。自分のグループ、そして自分が、どのように仲間との意見の違いから考えを深めていくのかを、興味深く参観させていただいた。どの授業でも、とにかく子どもが「学校に行くことが楽しい」というオーラを出していた。しかも、授業で友と学び合うことに対して、非常に意欲的であるという場面をたくさん見た。これは、附属岡崎中の校風に支えられていると思うが、確実に先生たちの日常の指導の成果が表れていると実感した。これがいちばん大事なことだが、これが実現されていることに「なぜだ」と、研究者として知りたくなった。

家庭科「過去も未来も生きる家」は、空き家問題を家庭科教育のアプローチから迫っていく授業であった。生徒がそれぞれ个性的で独自の追究を行っていて、語りが自信に満ちていた。「私が取材した〇〇さんによると…」や、「〇〇の資料を調べた結果…」など、発言が根拠に基づいており、真似ではなく自分の言葉になっていた。それを聞き合いながら、自分と仲間との差異を確認し吟味し合い、自分の考えに深化を遂げていくという子どもの話し合いであった。

教師がやることは、子どもの意見を板書に構造化するということであった。社会科「チャレンジ、キャリアアップ社会！」の授業は、これからの働き方をみんなで問うという授業であった。のべ30人の子どもの意見が出てくるのだが、ある子どもの振り返りには、このように書かれていた。「今日の交流を終えて、心が揺れ動いている感じだ」と。

つまり、話し合いの結果、自分のもっていた意見は、自信に満ち溢れたものであったが、仲間の話を聞きながら、「違う考えもあるかもしれない」と動いたのだ。これを後退するものや曖昧なものに戻ったと考えるか。もっと先を見たときに、よい立ち止まりだと考えるのか。私はこの子どもの学びは、意味のある学びだったと思う。

今日、先生はこの子どもを4回指名して、この子どもの考えはだんだん深化していった。クラスみんなが終身雇用をなくすことのデメリットに気づいていないことに対して、「みんなの考えを改革したい」と書いていた。みんなが「フリーランスにいくだろう」と言っているときに、この子の発言は完全アウェーで、興味深い意見であった。このように一人追究で、自分の学びを深めていき、集団での意見交流が、自分の学びを確認し深める役割

になっている。個人追究なしに、「さあ、みんなで話し合おう」とやっている学校が散見されるが、本校では、一人追究で徹底的に自分なりの調べ学習を行い、自分の考えをつくらせている。だからこそ、自分の追究をみんなに聞いてもらいたいし、他の人はどう追究したのかを聞きたい。だから、話し合いというよりも「聞く会」であるといえる。それがよい感じの聞き合いになっているということは、学びが深まっているということである。

【本校の理念と本研究のテーマ】

本校の研究の理念は、生活教育にあり、子どもの生活から単元を構成している。こういうことにこだわる小学校は多いが、中学校では実現しにくい。その中で本校は、これに挑戦している。自分たちで行事を企画させていることや、時間をかけながら仲間と共にさまざまな問題を乗り越えていくことを、本校の教師たちはサポートしている。面倒くさいことであり、教師が企画して指示したほうが楽である。しかし本校では、徹底的に子どもに委ね、踏み込んで試行錯誤させている。このこと自体が、独創性や問題解決過程を深めることに関係している。だから、教育課程という枠組みで捉える必要があると考えている。

【研究主題について】

本校の5年間の研究のスタートラインには、「知識の役割が変わってきた。新しい人間像を考えて学校のあり方を考えよう」とあった。そこで、「新しい見方で捉え、よりよい考えを生み出す子ども」を我々は育てるのだという意味で、「独創性を育む」というキーワードが出ていた。これを見たときに、「独創的」と「個性的」をどう区別してるのかと思った。辞書的には、「独創的」は、今までなかったものをつくるという意味である。「個性的」は、その子に元々ある個性、その子らしさである。では、独創的でない人とはどういう人か。「規則を守れる人」や「伝統を大切にできる人」、「こだわりが強くてぶれない人」、「思い込みが激しくて、マニアックな人」。これが悪いのか。こういう人を保守的ともいう。こういう子どもがいたときに、その子を改造するのか。「独創性を育む」という研究タイトルにしたときに、先生たちの視野はどこまであるのかと思った。本研究のテーマを見て、「全員を国際的競争の最先端で、独創性が溢れる企業戦士を送り出そうとするエリート教育なのか」という見方をする人もいるはずである。

しかし、授業を参観したり、先生がたと話したりして、そうでないことを理解した。自分の認識の枠組みにとらわれず、異なる見方も採用して、より広い視野から自分の立ち位置を捉え直すことを、本研究では「新しい見方」という言葉に含み込んでいるとわかった。

「新しい」という言葉は、古い考えに戻ることや、古来より大切にされてきた考え方を否定するわけではない。

もう一つは、それまでの自分の考えを追究や意見交流をとおして、再確認したり再構成したりする部分を、「よりよい考え」と表現している。「よい」という教師的な価値判断をもち込んでいるのではない。昨日よりもグッドでベターな考えを要求するものではないことがわかった。学習によってゴールから後退したり、授業のせいで試行錯誤のループに入ってしまったたりすることがあっても、それを否定するものではないのである。

【本校の実践研究の構造について】

本校の研究の構造は、生活教育を重視する伝統を受け継いで、問題解決過程を大事にしている。これが底に流れており、どの活動でも大事にされている。ここに研究で掲げている四つの力が意識されている。生徒の問題解決能力を高める指導、「問いをもつ力」、「本質に迫る力」、「学びを表現する力」が意識されていて、指導方法上、「差異を把握する力」が絡まり合いながら、子どもの力をつけていることが理解できた。単元を見通したときに、問題を見だし、解決に迫って、生活につなげることが意識されていることもわかった。こうした問題解決過程の指導が深い学びになっているし、深い学びを誘発していると理論づけてよいと思った。こういうことを実際にやっているし、子どもにこのような力が育っているという感触をお世辞抜きにもっている。しかし、これが独創性を育むことに直結しているという論理が見えない。結果的に、こういうことをしながら独創性を育むことになっているが、これがなぜ独創性を育むことにつながるのかについては、もう少し説明が必要である。

【「独創性を育む」…ということ】

独創性を育むには、学校自体が独創性をもっていなければならないと考える。岡崎中がどのような独創性をもつ学校なのか。そのためには学校教育一般がもっている慣習に常にダウトをかける。「これはなぜやっているのか？」や「意味があるのか？」と、常に問い続ける学校でないと、子どもが独創性を育むことはできないのではないかと。

そして、教師目線の限界というのは、常に教師は生徒を育てるもので、生徒を評価目線で見ていくということである。もちろん、「この子はどうなったか？」や「指導されたとおりにできたか？」、「学習目標に到達できたか？」などと、常に評価目線でやるのがプロの仕事である。しかし、これを脱することをしないと、独創性を育むことにいかない。教師が想定した枠の中で授業を組んでしまうことになりかねない。教師自身が、限界のフィルターでものを見ているのではないかと意識する。それで固定概念を打破するという必要がある。そういう環境でないと、子どもは独創性を育めないのではないかと。朝のホームルームで、今日は誰が先生として来ているかわからないなど、子どもがサプライズを起こせるような、自分たちが生活を創ることができるという学校でありたい。行事を子どもに創らせていることはとてもよい。独創性を育むためには、学校がそういう性質を持っている必要がある。

これが高まっていくには、二つの資質能力が必要だと思っている。

一つは、「専門性」だ。独自の追究課題を常にその子が意識して磨き続けているみたいなものを、学校が保障しているということ。「そんなことばかりやっているとはいけない」ではなく、「今週はどこまで追究したの？」のように、学校が応援団になっているか。本校では、*Lifework* という時間が合って、これは総合の時間を使っていたり、特活に関わっていたりして、これがまさにどんぴしゃである。もちろん教科でもこれが関連しているであろう。

もう一つは、「柔軟な思考」だ。柔軟な思考というのは、ぶれないことやその子らしさということとはちょっと違う。状況判断して、時と場合によって思考を変えられるということだ。そうでないと独創性にはいかない。柔軟な思考は、どう育つか。簡単にはできない。日常の先生達の授業内でのコミュニケーションなど、いろいろなことに関係している。

具体的にどのようにすれば、この資質能力が高まるのか。私たちにできることを考えた。

一つは、「広い視野で考えさせる」こと。これは本校の授業でやられている。今日の授業でもたくさんやられていた。子どもは、「こうだ」と自信をもっているが、友達の話聞きながら、自分の意見を相対化している。「別の考え方もあるのだ」、「そんな見方もあるんだな」ということを常にやっていく。これは授業でできる。

次に、「未知のこと、未体験のことに出会わせる」こと。授業で新しい知識や材と出会わせるということも大事である。行事においてもいつものとおりのメニューでやりがちだが、「去年はそうだけど、今年はコロナの条件だから、これで考えてみよう」という、新しい状況で、常に今までにない条件の経験をさせていくことが大事だ。

最後にもう一つ大事なことが、「習慣をつくりかえる」こと。私たちは、ルーティンワークで動くほうが楽で安心していられる。その繰り返しの中では独創性は生まれないので、どこかをあえて崩すこと。私たち教師の仕事も、いつもと同じようにやったほうが楽で安定するが、私たち自身が変身すること、「アンラーン」というが、最近では、「学びほぐし」という日本語に訳されている。知ってることやできていること、わかっているつもりになっていることを一回捨てる。そして、もう一度、別の枠組みや視点で考え直すこと。すると、これまで生徒にこんなことを教えてきたと思い込んでいたのだが、一回ダウトをかけて学びほぐせば、「生徒に申し訳ないことをしていたな」と気がつくことがある。教師自身がアンラーンを起こし、習慣をつくり変え、新しい生活スタイルや学校スタイルを、常に先生たちが楽しんだり遊んだりするという発想があるかが問われる。

【この5年間の研究の到達点】

一人一人の生徒の個性を尊重したうえで、「独自性」を伸ばしている。記録からも授業からも、これはいえる。そして、自他の考えの差異を把握しつつ、問題解決を旨とする深い学びの経験を保障しようと先生たちが努力されている。そこで見た事実は、「共創性」である。友と一緒に創りあげようとする姿がどの授業でも見られた。この「独自性」と「共創性」をくっつけて、「独創性」になっている。一人一人を大事にし、個性に立脚した独自性を鍛えて、友と一緒に違いを確認しながら、乗り越えていく。共に創っていくということが大事にされている。その中で「独創性」が生まれている。

教育学者として最後にお願いしたいことは、独創性が大いに発揮される生徒ばかりではないということである。独創的ではないタイプの生徒は、必ずいるはずで、いてよいと思う。その子にとっては、どこまでいくと独創的なのか。みんな一律の同じ独創性ではない。目立つ子どもの独創的な発言や行動は、印象的であると思うが、目立たない子どもにとって、本研究がどのように独創性の芽を出すことに貢献できていたのかという視野で、いろいろなケースの、いろいろなタイプの子どもについて考えていただきたい。